

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 30 年 7 月 27 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 教育学研究科

職 名・学 年 博士後期課程1年

氏 名 津田 彩乃

助成の種類	平成 30 年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	比較文化心理学の国際交流協会 (International Association for Cross-Cultural Psychology Congress)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	What is awe? Individual Differences in Describing the Emotion and Experience of Awe in Japan		
開催場所	ゲルフ大学, ゲルフ, カナダ		
渡航期間	平成 30 年 6 月 29 日 ~ 平成 30 年 7 月 7 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空費(手数料, 燃油サーチャージ等含む):	198,550円
		ETA申請料:	595円
		宿泊料:	60,846円
学会参加登録料:		18,700円	
		(助成金を上記に充当)	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 多国籍の研究者との交流を持つことができ、大変貴重な経験をさせていただきました。また、学会では、研究成果を口頭発表することができた上に、司会者も任され、今後の研究につながるものになりました。このような貴重な機会をご支援いただいた貴財団に心より感謝申し上げます。		

成果の概要

京都大学大学院 教育学研究科
博士後期課程 1年 津田彩乃

私はこの度、京都大学教育振興財団の助成金を受け、カナダで開催された **24th Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology** に参加しました。この学会は毎年、文化および心理学の分野における問題を世界各国の方々とは話し合うために開催され、ヨーロッパ・アジア・北米・ラテンアメリカなど世界各地で開かれる学会です。今年はカナダで、多文化の利点・欠点をテーマとして、学会が開かれました。

私は **Paper Session** といった、自分の研究成果を発表し、他の研究者との意見交換を行うことを目的としたセッションにて、口頭発表を行いました。私の発表は、「**What is awe? Individual Differences in Describing the Emotion and Experience of Awe in Japan**」というタイトルで、畏怖という感情に関して、畏怖を測る尺度の日本語版を作成した結果の報告と、各個人に畏怖の意味を聞き、その個人差に関しての結果について発表を行いました。畏怖は恐怖や驚きと混じった大きな尊敬の気持ちとして説明されており、知覚された広大さと認知の更新を伴う感情と定義されています。また、畏敬の念は自己縮小の概念と関連しており、向社会性や幸福感につながっていることも示されています。主に西洋では、畏怖はポジティブな意味でとらえがちなのですが、日本においては恐怖と尊敬が入り混じっているということを報告し、地震などの記憶が畏怖感情を呼び起こす可能性があることを話しました。

研究発表後の質疑応答では、主に、畏怖のネガティブな側面に関して関心が寄せられ、何故そういった文化の違いが生じたのか、もし、ネガティブな畏怖を感じた場合、向社会的な行動が生じるのか。もしかしたら、人を助ける行動ではなく逆で、「他者の不幸は蜜の味」になる可能性はないのかといったとても興味深い指摘をいただきました。日本国内だけでは考えることのなかった視点を得ることができ、自分の研究の可能性を広げる機会になったと思っています。また、畏怖の感情について知らなかったと方も数多くいて、発表資料のコピーがほしいなどの申し出もあり、今回の発表を通じて、海外の研究者に対して、日本の研究力の発信に多少なりとも貢献できたのではないかと考えています。

また、今回のセッションにおいて、私は司会者という役割を任されました。自分の発表が終わった後に、4人の方々の発表が続いたのですが、彼らの発表の時間の管理と、質疑応答における、質問を促すなどの役割を担うことができました。ディスカッションが盛り上がりすぎてしまい、他の人の発言を中断する勇気がもてず、時間内で終わらせることが難しくなりましたが、管理の大変さも身をもって知ることができ、貴重な体験をすることができました。初めての司会だったため、課題ばかり残ってしまいましたが、海外の学会にて司会者をしたという経験は、今後、研究者を目指す上で、大変貴重な準備になったと思います。

さらに、学会をきっかけとして、貴重な出会いもありました。ベトナム戦争の際にナパーム弾を投下され、逃げ惑う村人らとともに裸で逃げる、背中にやけどを負った当時9歳の少女、キム・フックご本人と直接お会いし、お話を伺う機会に恵まれました。当時のことに加え、今もまだ痛みを苦しんでいること、治療を受け、やけどの跡をなおしていること、家族に支えられていることを伺うことができました。何より、一番印象に残っているのは「許す/forgiveness」の言葉です。「やけどの跡は残っていて、痛みもあるけど、私の心はいつも穏やかで、それは許すことができているからだ」と満面の笑みでお話してくれたことがとても記憶と共に心に響きました。このようなお話を聞くことができたのも、すべてこの学会に参加することができたためであると思います。

今回、この **24th Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology** に参加させていただき、現在世界で最先端の研究を行っている数多くの研究者の話を聞いたことに加え、キム・フックさんと直接お話するというかけがえのない経験をすることができました。また、司会者といった貴重な体験もすることができました。学会に参加し、ディスカッションを通して、多くの刺激を受けるとともに、研究への新たなアイデアの創出がありました。この学会で得られた成果を日本に持ち帰り、今後の研究につなげていきたいと思えます。

最後になりましたが、本会議への参加助成をしていただきました、京都大学教育研究振興財団に心より御礼申し上げます。